

ローマ人への手紙1章18-32節 「神の怒りの啓示」

1A 真理を阻む者たち 18-23

2A 神の引き渡し 24-32

1B 体の辱め 24-27

2B 無価値な思い 28-32

本文

ローマ人への手紙 1 章を開いてください、私たちは前回、1 章の前半を見ていきました。17 節まで読みました。18 節から見ていきますが、パウロがその前半部分において、神の福音を伝えたいというローマ人への思いを言い表しました。そして、福音について 17 節でこう述べます。「¹⁷ 福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」

パウロは、3 章 21 節以降で、このこと、信仰によって与えられる神の義を具体的に語り始めます。イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人によって与えられる義です。けれども、人々はこの良き知らせに対して、「私にはその必要はない」として拒みます。なぜなら、自分が救われる必要を感じていないからです。異邦人であれば異邦人特有の言い訳がありますし、ユダヤ人にはユダヤ人の言い訳があります。それはあたかも、自分は、そこそこ、正しさがあると思っ

ているからです。神のみが正しい方である事、この方の恵みにあずかる事を拒んでいます。そこでパウロは、すべての人が神の前に罪を犯したことを論じていきます。そこには差別がなく、ゆえに、イエス・キリストの御名による救いも、すべて人に差別なく与えられていることを論じていきます。

そこで 1 章 18 節から 3 章 20 節の部分で、パウロは不義によって真理を阻んでいる人々の姿を描いていきます。初めに異教徒から話していきます。イスラエルの神を知らず、神の律法を知らない人々のことを話します。ローマにいるキリスト者たちは、そういう人々に囲まれているわけです。ギリシアとローマの文化と習慣の中に生きる、異教徒の人たちです。ですから、大半が聖書を知らず、その掟を知らない日本の中に生きている私たちにとって、思い当たることが数多くあります。「私は、聖書の神について教えられていないから、その神については知らない。知らないことに対して、なぜ関わらないといけないの？」ということについてです。パウロは基本的に、「いいえ、あなたは神をすでに知っています。そして、自分の頑なさの中のその真理を抑えつけているのです。」ということなのです。

1A 真理を阻む者たち 18-23

¹⁸ というのは、不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが

天から啓示されているからです。

パウロは今、「神の義が福音の中に啓示されている」と言ったので、人々がその神の真理を不義によって阻んでいる話を始めています。ここでの「阻む」という訳が良いですね。真理ははつきしているのに、それでも敢えて拒んでいるのです。「押さえつけている」という意味合いの言葉です。そして、「不敬虔と不義」と言っていますが、不敬虔は神を敬っていないことを言っていて、不義は道徳的に正しくないことを話しています。道徳的なことは目に留まりやすいですが、道徳的なことは実は、不敬虔、神を敬いところから来ていることをパウロは、雄弁に論じていきます。

そして、「神の怒り」が啓示されているとあります。神の怒りと言いますと、しかも天から啓示されていると言いますと、あたかも雷親父が拳骨を振りかざすように見えるかもしれません。それは、間違いです。まず、ここでの「怒り」は、単なる怒り散らす感情表現ではありません。裁判官が、凶悪な犯罪に対して、厳しい判決を下す時の怒りのようなものです。正義と公正に照らして、あきらかに誤っていると思われることに対して、冷静でありながら、なおかつ強い悲しみと嘆きをもって判決を下す時のような怒りです。非常に抑制された、やむを得ない、半ば強いられるようにして表している感情です。神が人に怒りを現わす時は、強いられて出していると言ってよいでしょう。人を滅ぼすことは神が最も望まれていないことです。しかし、人々の頑なさのゆえに、義なる方ですから、滅ぼさざるを得ないという性質のものであります。

そして、ここで大事なことは「天から啓示されている」とあることです。すでに啓示されている、天から現れているのです。前回、お話ししましたが、神の怒り、また裁きは、終わりの日に突如として現れるものではありません。地獄の火の池に投げ込まれて、苦しむことが怒りの現れだとみなしますが、それはあくまでも結果であって、主要なことでないことを学ぶのが、今日と言っても過言ではありません。日本でも、なにか悪いことをしたら、死んだ後に閻魔様によって懲らしめられるという印象がありますね。終わりの日だけに受ける罰と捕らえがちです。

しかし、ヨハネによる福音書 3 章で、「信じない者はすでにさばかれている。」とイエス様が大胆に述べておられる箇所があります。「ヨハ 3:18-20 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」

御子が来られたのは、人が裁かれるためではなく、救うために来た、と始めに言われています。ですから、地獄を振りかざして説教すること、伝道することは、私は間違っていると思います。むしろ、すでに罪の結果を負っているのですから、そこからの苦しみから救いを語らないといけないと思います。けれども、それでも御子のところになぜ来ないのか？はつきりと、「自分の行いが悪い

ために、人々が光よりも闇を愛した」と言っているのです。罪の赦しと清めがあるのに、その霊的な祝福を自ら拒んでいて、それで闇の中に自分で選んで留まり続けていることがあるのです。そして、その留まり続けていること自体が、すでに神の裁きを受けているということなのです。

意外に、天国と地獄は、それぞれ行く人にとって違和感がないものです。イエス様を愛して、イエス様を礼拝して、義や憐れみ、良きものに飢え渴いている人は、天に入ってもその延長にしかすぎなかったことを知るでしょう。聖書で、天の情景を読んで行ってみてください。その大半が、御座におられる神とキリストを礼拝し、この方に仕えている姿です。そして、神といったものは自分の生活の中で考えない。自分にある問題には直視しない、自分の生き方でやっていく。そう決めている人には、地獄に行っても違和感がないでしょう。神がないところ、その恵みがないところ、自分の問題がそのまま残っているところ、自分だけの世界、孤独な世界、後悔がいっぱいのところ、ということになるのです。神の怒りは、地獄を待つまでもなく、自分の不義の中に生きているということ自体に既に現れているのです。

¹⁹ 神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。²⁰ 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。

午前礼拝でじっくりとお話をしました、「一般啓示」また「一般恩寵」と呼ばれるものです。聖書や神の律法を知らずとも、すでに被造物の中に明らかにされている神のお姿があります。そして、そのことが分かると、圧倒的にクリスチャンが少なく、異教の文化や伝統を持っている日本においても、創造主であられる神の恵みが豊かにあることに気づきます。みなさんとの交わりを通して、私は気づきます。信仰の決断をする時に、別に親がクリスチャンでなくとも、「本来あるべきところに戻ってきた」という言い方をされる方もいましたね。神はおられると気付いていたのに、自分の道をまっしぐらに歩んで、背いてきた。」ということです。聖書によって、自分の知っていた神が明らかにされて、それでキリストを通して戻ってきた、ということです。

世界宣教の話を書きますと、興味深い話をたくさん聞きます。全くの未開の地において、いろいろな偶像礼拝に関わる因習があるのですが、実は、アテネにあった祭壇のように、「知られない神」みたいな崇拜があったりするそうです。それは、天地を造られた神、偶像によって形造ることのできない、それを超えた方として、だれだか分からないけれども祭壇を造っている。それなので、宣教師が、その方が誰であるかを語り、イエスなのだということ、それでイエスを信じることが起こる、という話です。

詩篇 14 篇 1 節に、「愚か者は心の中で「神はいない」と言う。」とありますが、これは何も、進化論を信じていて、無神論に立っているというような、知的に神を否定する話しを言っているのでは

ありません。あまりに神がおられることが、被造物によって明らかなのに、頑なに拒んでいることを意味しています。

²¹ 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。²² 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、²³ 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。

罪の根本をパウロは説明していることを、午前礼拝でお話ししました。私たちの考える罪、不義とはかなり違います。それは、神を神としてないこと、これに尽きます。神を神としてないので、感謝が生まれません。そして、思いが虚しくなります。そして、心が鈍くなり、道徳的にも無感覚になっていくのです。

そして23節ではさらに、偶像礼拝をする姿を描いています。よろしかったら後で、イザヤ書44章9節以降を読んでみてください。そこに偶像を造ることの空しさを雄弁に、イザヤは語っています。同じ木を使って、その木の一部は火で燃やして、自分の体を温めて、「ああ、温まった。炎が見える。」と言っているけれども、その残りで偶像を造り、「私を救ってください。あなたは私の神だから。」と拝んで、祈っているのです。

偶像礼拝の根本の問題は、「支配欲」です。エバが、蛇によって神のようになると惑わされて、善悪の知識の木から実を取って食べましたが、神のように自分で物事を判断したい、自分の力で行きたいという、神からの独立です。すべてを創造し、自分をも創造したという方を受け入れて、初めて神の似姿に造られた者として、物事を判断し、物事を管理することができます。けれども、自分は支配されたくない、すべて理解できるもので生きたいと願うので、自分の理解できること、自分の願いどおりのものを求めます。これが偶像礼拝の始まりです。

それで、目に見えるもの、被造物にあるものを形造ってそれを拝みます。多くの場合、自分の欲求を表現しているものを拝みます。イスラエルの人たちが住んでいたカナン人の神々、また周囲の国民の神々は、権力、性欲、快楽、富などをそのまま表している神々です。エジプト、バビロン、ギリシア、ローマにある神々も、同じような存在です。ですから、次に出てくるように、彼らの偶像礼拝と忌まわしい行いが、密接に結びついていることがあります。パウロがこの手紙を書いた、当時のギリシア・ローマ社会ではそれが顕著でした。

そして、偶像を拝んでいると、ますます自分の心は暗くなっていきます。偶像は語ることなく、聞くこともできません。自分が理解し、把握しているものですから、自分よりも知能や程度が低いのです。それに仕えていますから、その低められたものよりも、さらに低められるのです。詩篇の著者は、「115:8 これを造る者も信頼する者もみなこれと同じ。」と評しました。ですから、偶像とは、

伝統的に受け継がれている神仏のようなものに限りません。むしろ、自分が情熱を傾けているものならそうなのです。全く偶像と呼ばれるものを拝んでいなかった、パリサイ人や律法学者に「姦淫の時代」と、霊的姦淫である偶像礼拝を犯しているとしてイエス様は咎められました(マタ 12:39 等)。キリスト者として、キリスト以外のものを実質的に大事にしていたら、その対象が偶像となってしまいます。

「自分たちは知者であると主張しながら愚かになり」と言っています。ローマの社会で知識人と呼ばれる者たちが、道徳的に愚かなことを行っているということは、いつも起こっていました。現代社会でもそうですね、こんなに知的なことにおいて優れているのに、なぜこんな愚かなことをするのか？と驚くことがあります。それは神への畏れ敬いがないからです。「箴言 1:7 主を恐れることは知識の初め。愚か者は知恵と訓戒を蔑む。」

2A 神の引き渡し 24-32

1B 体の辱め 24-27

²⁴ そこで神は、彼らをもその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。そのため、彼らは互いに自分たちのからだを辱めています。²⁵ 彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

ここから、神の御怒りの現れが始まります。「引き渡されました」というところが、そのところですよ。彼らが心の欲望のままに汚れに引き渡されることによって、自分のうちにある神のかたちが著しく損なわれること、その汚れによって当然の報いを受けるままにしておられること、これが神の御怒りの現れなのです。

その典型例が、ここでパウロが言っている「互いに自分たちのからだを辱めて」いるという淫乱です。聖書では、ノアの時代に、人々の思い計ることが悪に傾いていたという話から出てきます。ノアでさえ、洪水の後、全裸のまま泥酔していた姿があり、影響を受けていました。そして、アブラハム、イサク、ヤコブの時代、ソドムとゴモラが主に裁かれたのは、その豊かな社会で道徳的退廃が進み、同性愛の中に、はまっていったからです。ヤコブの娘ディナが、土地の首長の息子に凌辱されて、そのまま彼女を自分の妻にしようとしていました。このようなことは、イスラエルにはあってはならない、という注釈があります。ヨシュア率いるイスラエルが、カナン人たちを聖絶したのは、カナン人たちに忌まわしい慣わしがあったからです。性的に乱れていて、望まぬ子たちがどんどん生まれましたが、それを幼児犠牲として、神々に献げていきました。何百年もあとに、彼ら自身がその忌まわしい慣わしを行っていったために、外国の勢力によって滅ぼされたのです。

ギリシアやローマの社会も、先ほど話しましたようにそのことが顕著でした。神話に出て来る神々自体が、性的に奔放ですから。エペソに行った時は、ローマ帝国で三本指に入る図書館の目

の前に遊郭がありました。知の巨頭の目の前に淫乱の場があったのです。そして、そこは男根のかたち造った偶像の遺跡が見つかっています。日本も、今でこそ伝統文化として保存されているものの中に、神々に関わる因習的な慣わしに淫乱がありますね。盆踊りはその典型で、先祖供養のための行事であったのですが、そこに祭りの要素が入ってきて、長いこと、乱交パーティーの状態になっていました。明治維新以降、風紀を乱すとして取り締まりの対象になっていきました。

そして、パウロは造り主への賛美を挿入していますね。賛美せざるをえなかったのでしょう。偽りの中に生きていて、この方こそが真理であると宣言し、ほめたたえています。

²⁶ こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、彼らのうちの女たちは自然な関係を自然に反するものに替え、²⁷ 同じように男たちも、女との自然な関係を捨てて、男同士で情欲に燃えました。男が男と恥ずべきことを行い、その誤りに対する当然の報いをその身に受けています。

パウロは、「心の欲望のままに汚れ」からさらに、「恥ずべき情欲」と突っ込んでいます。いわゆる同性愛行為です。あらゆる淫乱、性的な乱れの中で、この行為が典型的なものとして挙げています。ソドムとゴモラが滅ぼされたのは、これが原因です。今、LGBT 運動が世界中で大きく広がっていて、パウロのこの言葉は自分たちには当てはまらな**い**と言っています。ローマ社会では、異性愛者が性的快楽をとことんまで突き詰めて同性愛行為に及んだ、とか、神殿男娼や神殿娼婦のことを指しているのだとかいう解釈をします。しかしパウロは、ここでの男と女を敢えて、生物学的な男性、女性のギリシア語を使っていて、男が男と性的に絡むこと、女が女と性的に絡むこと、これ自体が「自然に反するもの」「自然な関係を捨て」と言っているのです。

ユダヤ人は、律法の中に男が男と寝ることは死刑とありますから、同性愛行為は罪として退けています。神が男と女に人を造られた時に、その結びつきをもって生めよ、増えよと言われたので、男女の結婚こそが私たちの性の喜びをもたらすものとして定めておられます。

当時のローマ社会は、同性愛は当たり前でした。ギリシア時代、男性は両性愛者でした。哲学者プラトンの作品にも、異性愛よりも同性愛がもっと好ましいものとして書かれています。教育は男女分けて行われていたので、男と男の友情を越えて、愛情がもたれることは許されているどころか、奨励さえされていました。ローマ社会に入って、その習慣が受け継がれて、中上流の階級の人々は両性愛の関係を持っていました。帝国の初めの皇帝、15人のうち14人は両性愛者だと言われています。パウロがこの手紙を書いている時の皇帝はネロですが、既に二人の男と結婚をしたことがあり、その時はスポルスという少年を去勢させ、女装させ、結婚しようとしていました。

そして、「その誤りに対する当然の報いをその身に受けています」とあります。これは人間に与

えられている尊厳が、そのような行為によって損なわれてしまうことを、第一に話しています。同性婚が、権利の拡充としてもはやされている世の中ですが、同性婚によるカップルの間には、離婚率が非常に高いです。第二に、性病もこのことに含まれるでしょう。同性愛行為だけが何も性病の根源ではないですが、やはり、こちらもかなり感染が広がっています。

2B 無価値な思い 28-32

²⁸ また、彼らは神を知ることによって価値を認めなかったため、神は彼らに無価値な思いに引き渡されました。それで彼らは、してはならないことを行っているのです。

三回目の「引き渡されました」という言葉です。パウロは再び、神を知ることによって価値を認めなかったと言っています。そして、あらゆる「無価値な思い」を取り上げています。「してはならないこと」と言っていますが、神の律法の知識がなくとも、道ならぬことと認めることのできるものばかりです。

^{29a} 彼らは、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれています。

初めは「満ちる」と言っていて、次に「まみれている」と言っていますね。満ちるのは、あらゆる不義や悪、貪欲や悪意です。次に、まみれているのは、妬みから生じるものです。妬み、殺意、争い、欺きなど、対人関係に及んでいます。

^{29b} また彼らは陰口を言い、³⁰ 人を中傷し、神を憎み、人を侮り、高ぶり、大言壮語し、悪事を企み、親に逆らい、³¹ 浅はかで、不誠実で、情け知らずで、無慈悲です。

これは、口による行いですね。陰口、中傷、また神を憎むような冒瀆的なこと、侮ること、高ぶりや大言壮語。そして、親を親とみなさない無慈悲、浅はかさ、不誠実さ、情け知らずという事に及んでいます。

³² 彼らは、そのような行いをする者たちが死に値するという神の定めを知りながら、自らそれを行っているだけでなく、それを行う者たちに同意もしているのです。

パウロは、彼らが弁解できないように、とどめのように論じています。「そのような行いをする者たちが死に値するという神の定めを知りながら」と言っています。そのような行いは、文化的に、習慣的に認められている部分、皆が行っているからいいだろうとされている部分があります。そのために、「これはユダヤ教やキリスト教が定めた倫理規範で、それで定めるのは独善的だ」という意見が多いです。いいえ、こんな話があります。未開の地における宣教ですが、いろんな文化があり、そこで聖書を教えたら、イスカリオテのユダが英雄視された部族があったそうです。裏切って、殺

すのは当たり前の文化です。ところが、人を殺す時に白昼堂々とは行わない、夜に行うそうです。分かっているのです、その行為がいけないということ。

ヘブル 9 章 27 節には、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とあります。これは聖書に書いてあることですが、聖書の知識がなくとも、自分がここに列挙されていることを行っているならば、どこかで報いを受けなければならないことを知っているのです。それは、天地を造られた神ご自身が、すでに天から啓示していることで、地上で裁判所に出頭しなくとも、神の前の法廷に出て行かなければいけないことは薄々、知っているのです。ユダヤ・キリスト教でなくとも、例えば日本では閻魔様が舌を引っっこ抜くという言葉があるように、死後の裁きを描いています。

そして次に、知っていながら「自らそれを行っている」ということです。ここで、「知らなかった」という弁解はできないのです。イエス様は、「ルカ 12:48 しかし、主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべは、少ししか打たれません。」と言われましたように、知識に応じて裁かれますが、こうした一般啓示、被造物に表れ、また良心にも表れる神の知識、真理に逆らっているのだから、それに応じた神の報いを受けるのです。

そしてさらに、パウロは突っ込んでいます。「それを行う者たちに同意もしている」と言っています。かつてローマにはコロッセウムという競技場がありました。そこでは、剣闘士が死ぬまで格闘しました。また生きた野生の獅子を解き放って、剣闘士が戦うということも行いました。そしてキリスト者への迫害が始まったら、そういうところにキリスト者を放り込んで、生きた獅子の食い殺されるのをローマの庶民はエンタメとして楽しんでいたので。その時には皇帝も庶民も一つになる瞬間でした。流血と残虐な行為をもって一つになるとは何事か！と思います。私たちの社会に、こうやって代理でやってもらって喜んで喜んでいるものは、数多くありますね。

ここでパウロは、たとえ自分自身がその行為を行っていなかったとしても、心の中で同意していることの問題を取り上げています。それが 2 章につながっていきます。こういった不義と不敬虔の中で、神の真理を阻んでいる人々がいるなかで、自分はそんなことをやっていないと自負している人々に対して、パウロは完膚なきまで、「それでも、あなたは裁かれる」という議論を展開します。

午前礼拝でも話しましたが、神を神としないという心の中での、真理への反抗があるために、心が鈍くなり、暗くなっている問題があります。今、パウロが列挙した不義、無価値なこと、恥ずべき行いは、隠れたところ、闇で行われているので、明るみに出されることは少ないです。神の恵みを受け入れないので、自分たちで頑張っている分、問題が表に出て来ず、複雑化し、闇の部分になっていくことが多いです。それを明るみに出したのがキリストの十字架です。根源のところ、その罪に取り組んでくださいました。